

# 「内的言語形式」論

金子 亨

## はしがき

われわれが日常触れている先住民族言語—その多くは少数話者言語であるが—には、独特なことから捉え方があって、そのようなところのあり方に出会うたびに、驚き感心して改めてことばとの出会いの幸せを感じるものである。しかし例えばソシュールの記号論では記号を構成する積極的要素 *signifiant* は言語によって違っても、記号の表す概念 *signifié* はコンスタントであると信じられてきた。またチョムスキーのいう「深層構造」もまた全ての言語に共通であると主張されてきた。しかしこれらの考えは根本的に間違っているのではないだろうか。記号の *signifiant* はもちろん、*signifié* もことばによって違う、「深層構造」も論理形式 LF も言語によって可易である。何故なら、ひとの自然も生活もところも多様だから。ここではこの問題の思想的根拠を探そうと思う。

## 1. 内的言語形式という思想

「内的言語形式」というのはフンボルトの用語である。彼の遺稿『ジャワ島のカーヴィ語について』(1836)の序論「人間言語構造の多様性とそれが人類の精神発達に及ぼす影響について」\*<sup>1</sup>では、その第21節に「内的言語形式 *innere Sprachform*」の表題をつけてこの概念について論じている。

### 1. 1. 「内的言語形式」とは

フンボルトによると、内的言語形式とは、繊細で豊かな音声形式によって担われて実現される、言語の純粹に知的な部分を指す。この形式は人類の知覚・思考・感情の法則に則って生成された知的操作の賜物であって、そこが人の精神活動の総体が関わる言語生成という知的活動の場である。またそれは諸民族がその形成過程で取り込んで刻印してきた知的な特性をことごとく体現している。言語の音声部分が言語ごとに非常に異なることは言うまでもないが、言語のこの理念的部分も精神の自立的活動によって生成されるので、人間共通の知的目的と手段に対応してさまざまな程度に差異を作り出している。ここで諸民族の個性が言語の知的部分に際限のない多様性を作り出している。

例えば、動詞の構造は、統語的差異に併行して、基底にある本来は共通の概念から異なった派生形式を作っている。サンスクリット語とギリシャ語とを比べると、サンスクリット語では話法や時制の概念が未発達であることに気付く。不定詞の概念についても同様である。動詞の理念構造の完全性がこのような差異を顕現することがある。この差異が動詞で現れるのは、動詞が概念と存在の統合の場であるためである。

モノの表示関係と語の文法形態とは大抵知覚の一般形式と概念の配列に帰せられるので、そこには分かり易いシステムが存在する。つまり言語意識の深い場所で言語全体は簡潔な概念に基づいている。人が内外の対象と出会って概念を生成するときには民族の特性が表れるが、その現実的客観性と内的主観性には段階が見られる。ここに言語と文学と発想の民族性の根源がある。そしてこのような感性と概念

形成の違いが統語法に影響を与える。しかしこの言語ごとの文法法則も言語の使い手の思考力と感性の展開に委ねられてはいる。そこに文学と哲学の発展の縁がある。知的概念と内的感覚とを音声形式によって表示しながら一進一退の歩みを進めることによって人類はその偉大な精神的管理を推し進めてきた、という。

このような論議を進めた後フンボルトは次いで22節で「音声と内的言語形式との結合」という項目を立てて、言語の本質理解の論議をもう一步進める。言語が完成するには内的言語法則が音声と不可分の結合を果たさなければならない。この結合のよって言語生成行為がひとつに統合される。この統合によって言語的に生成された心がその響きを得て、言語美学が成立する、という。

この22節以降では言語のさまざまな手順について、とくに語構成と形態論について詳論するが、この点は別に稿を改めるとして、ここでは、21・22節のもつ問題を数え上げてみよう。

## 1. 2. 「内的言語形式」の特性

「内的言語形式」は言語表現の知的部分を指すフンボルト独自の思想であるが、その主な特徴を要約すると次のようになる：

### (1) 言語生成

「内的言語形式」は人の言語生成Spracherzeugungの結果であるという\*<sup>2</sup>。すなわちここでの内的・認知的部分が外的・内的対象に働きかけて、それを概念化して、それに音形を付与した結果の形式であるという。従って、それはところが音と出会う場であって、それはちょうど言語の発生がこの奇跡の出会いを作ったことを思い出すと\*<sup>3</sup>、本源的な言語生成の先史的状况に対応する。このヒトの本源的なところの働きが人と人の集団が言語を生成する場で一貫して活性化されていることをフンボルトは絶えず念頭においていたのであろう。

### (2) 心的特性

「内的言語形式」が言語形式の心的部分であるというのは方法論的抽象である。もちろん意味だけをとり出して表記することは抽象操作なしには不可能である。しかしフンボルトの時代にはそのための抽象操作を表示する方法が発達していなかった。言語の心的部分だけでなく、その音声部分を表示する方法、つまり音声学的記述方法もまだ開発されていなかった。その後言語の音形式については物理的に記述可能で、個別言語的特性を棚上げすることができるようにはなったが、意味の表記が一番古い段階でも一階論理による他はなかった。しかし今日ではそれだけを機械言語\*<sup>4</sup>で表示して、多言語翻訳に使うこともできる。しかしその場合でも音声と音韻との間にあるのと同様な差異がそこに在ることが軽視または捨象されるのがいまだに普通である。音韻論に対して音声学に相当する科学分野としてさまざまな記号論理的方法が動員されている。しかしこれからは、「内的言語形式」が意味する言語の心的特性を機械言語で表示するときに必然的に脱落してしまうような要素に再び注目することが必要であろう。

### (3) 形式の可塑性

「内的言語形式」は「外的言語形式」と同じく言語によって差異がある。同じものを表すのに異なった

音を用いるのは言語表現の原則である。この原則から外れて、同じものが同じ音や似た音で表されると、偶然か借用か親戚かという疑いが生じる。この原則が音声表示の個別言語的相対性である。この相対性は、ある言語が特定の音声の群を自分の言語では一つの音韻であると認定して、そのように決めた音韻の群を自分の言語の音のシステムであると認定したことによって生じる。「内的言語形式」も個別言語的に相対的である\*<sup>5</sup>。何故なら、こころの内・外にあるモノ・コトを把握して概念化する仕方が人と人の集団によって異なるからである。ここに言語生成の知的側面に民族語ごとの差異が生まれる。フンボルトはサンスクリット語やギリシャ語の時間把握の様式の差やモダールを例にあげている。語の概念だけでなく文法機能で見られる言語生成様式の差異に注目したからである。しかしその差異の幅には制約がある。言語生成が基本的にヒトの環境と認知とに依存するからである。

#### (4) 概念化のヒト的条件

外的・内的言語形式の個別言語的相対性はヒトの存在の内外の生態・環境的条件に制約される。種としてのヒトに普遍的な知覚・思考・感情の条件に従った認知が言語生成の本来的な条件であって、言語の生産と理解もヒトの内的・外的存在条件に依存する\*<sup>6</sup>。つまり個別言語的相対性はヒトの普遍性の枠内で働く。日と月、天と地を区別しない言語はない。口蓋垂内破と両唇外破を一つの音韻とする言語もない。赤道地域の言語に数種の雪の区別を求めることはできない。

フンボルトはヒトの知覚の一般形式と概念の配列が分かり易いシステムを作って言語生成の基底をなしていると考えた。言語生成の場では現実の客観性と意識の主観性とが程よく結合して言語要素を構成するというのである。

#### (5) マクロ言語記号論

言語の語彙がとまったひとつの概念に対応することは分かり易い。個別言語の言語生成が固有のくくり方で外界を捉えて独自の概念化を作っていることも道理である。しかし語を超える言語単位で意味の概念的形式を記述することは難しい。フンボルトはひとつの語彙を超えた単位で概念生成の様式を捉えようとして、まず形態的な側面の分析に向かった。その最初の論議が語の孤立・屈折・膠着という形式の意義であった。そこから語の統一性の条件を問い、諸言語の語形成の形式の中に種々の総合体系\*<sup>7</sup>ついて論じる。単一語彙と統語との絡み合いの様相を間言語的に把握しようとしたのである。このことはフンボルトの「内的言語形式」が語彙的概念構成を超えて統語の領域に及んでいることをしめす。ソシュールが言語概念を語motに閉じこめたに比べて、フンボルトは言語概念の生成を、語を超えて文と発話(かれの表現でRedefuegung)に及ぼした。従って、「内的言語形式」は語彙的概念を超えて少なくとも文の知的構造に関わるとしなくてはならない。つまりそれはマクロの言語構造体の知的形式範疇である。

#### (6) 言語美学

「音声との結合によって内的言語法則は言語の完成体を形成する」と22節の冒頭にフンボルトは書いている。このとき彼の念頭にあったのは言語美学であった。ギリシャ古典詩の韻律論や漢詩の韻配列であったろう。かれにとって音声と結合しない言語要素は単なる情報メディアで、たましいを揺する効果を十分にはもっていない伝達用具であると映じたのかも知れない。音声の役割が「内的言語形式」の

表示だけではなく、こころの表出であるを後の構造主義は忘れがちであった。このことはまた言語発生が映像的概念形成だけではなく、音声運用の機能を進化の前提としていたことを意味するのかもしれない。

### 1. 3. 「言語的概念」

フンボルト『言語の多様性』(略称)の翻訳(\*1参照)の多くは「内的言語形式」を直訳しているが\*8、George Buck & Frithjof Ravenによる英訳だけはこれを一貫してlinguistic concept と訳している。この訳の理由は書かれていない。しかし熟考された訳だとおもわれる。だが「内的言語形式」という思想を上述べたように解釈すると、少なくとも次のような解説が必要である。

#### (1) 「言語学的概念」の射程

上記2. 2. (5)の項で述べたように「内的言語形式」の思想は語彙の概念を超える。従って1世紀後にソシュールが講じたと称されるような言語記号の概念とは射程が違う。ソシュール『一般言語学講義』「第一編一般原理、第1章 言語記号の本質：記号、所記、能記」\*9の項でソシュールは、所記signifiéの例としてequus (ラテン語 馬)と"arbre", arbor (フランス語、ラテン語 木)をあげて、それがそれぞれのimage acoustiqueと一体に結合してsigne linguistique を作ると説明したとされている。この講義で言語記号についての解説に当てられたのはもっぱら語motsであるので、signifié は語彙の概念と通例考えられてきた。一方で、フンボルトの「内的言語形式」は、後の語形成に関する章で接辞やcliticsなどを問題にしている点で語より小さい単位を、また21・22節で統語的単位を問題にしている点で、語を超えた大きな統語的な言語単位を含む概念である。特に接辞を含む語形成単位については27～29a節にわたって註7(\*7)で記したような語形成手段を考察の対象としているのであるから、「内的言語形式」は総合的結合体の意味の構成を含む。従って、Buck/Raven訳のlinguistic conceptを語彙的な単位に矮小化することはできない。それを「内的言語形式」の正しい訳語とすれば、語彙の単位を大小の双方に向けて拡大して、接辞も統語的単位も含む言語形式の知的部分を指すと考えなければならない。

#### (2) 言語内的存在

ヒトの認知はこころの内外にある存在、モノとコトを把握する。言語生成はその認知から言語的概念を構成する。モノとコトの客観的実在性を捨てて、これらに関わる心的存在だけを現実とするような哲学的立場についてここでは論議しない\*10。フンボルトの「内的言語形式」は音声形式との結合を前提としているので言語内的な概念である。またBuck/Raven訳の「言語的概念」も絶えず「言語的」を付している点で言語内的な概念を指す。従って、「内的言語形式」も「言語的概念」も、脳科学的対応をとるならば、脳内記憶装置に安定的に定着して、呼び出しシステムからの情報によっていつでも立ち上がる準備が出来ているような神経組織のモジュールに生理的に依拠していると考えてよい。ここで呼び出し装置とは言語の音声形式を受け取り、その情報を概念システムモジュールにつなぐ脳内のシステムであって、このシステムも複雑なモジュールを作っているはずだが、これら二つのモジュールの結合様式はまだ分からない。いずれにせよ知覚的反応の処理とは異なった複雑な連合野結合を基盤とする。従って、言語内概念とは、この二モジュールの安定的結合によって定着したこころの形である。

ここで問題が二つある。一つは非言語的認知の問題、第二はメタ言語の問題である。第一の非言語的認知はことばにならない考え、ことばになる前の考えなど、日常的に経験する認知であって、音形をもたないので、記憶されていても呼び出すことが出来ない。あるいは安定的な記憶が出来ないのかも知れない、つまり記憶の場所が違うのかも知れない。しかし前言語的概念はいつでも作られる。説明的に作られた概念に未知の音形を付与すると、それは言語的概念に転化する。それを繰り返し記憶することで安定的記憶になる。こうして新語によって語彙が増える。非言語的認知が言語に転化するには認知された概念に音形を与え、それを安定的な記憶装置にしまいこむことができればよい。言語記号化である。第二のメタ言語は、例えば、名詞句、使役要素などの用語についてみると、これらは複雑な概念を説明的に定義してそれに見慣れない音形を与える操作であるから、通常の定義的な抽象語彙と変わりはない。言語的概念に転化するときの手続きが「人工的」なだけである。

このように言語的概念と境界をつくって対立するのは、認識二元論に立つ限り、こころの内外の事象に限られる。フンボルトが客観的現実・主観的内面と呼んだものである。これを以下ではカタカナ書きのモノ・コトと略称して、それらの構成体を事態、イベント、event などと呼ぶこととする。これらは前定義的な概念であるが、論議の文脈によって説明的に定義可能である。例えば、「音形付与以前の概念」は前言語的なメタ言語類似のモノ・コトである。簡単な事例をあげるならば、1人称代名詞は文法のカテゴリーであって、言語内的な操作概念である。一方で、話し手は外の世界の実体であって言語外的な存在である。1人称代名詞と話し手の間には記号関係が成り立ち、伝統的な記号論に従うと、話し手は1人称代名詞の指示対象であるとされてきた\*<sup>11</sup>。話し手は言語外の存在、1人称代名詞は言語内の文法カテゴリーである。

### (3) 「内的言語形式」の位置

「内的言語形式」の場について補足する。フンボルトの思想では、「内的言語形式」はまず個別言語の文法の内部にある。それは個別言語の差異を担う文法形式の一部である。個別言語は人類のもつ諸言語の一つであるので、それは諸言語の言語構造の一部をなす。従って、それは人類の言語に内在する知的構造体であって、諸言語の構造的差異を担うパラメータを含む。フンボルトのあげた具体例では、音声形式の多様性、サンスクリットやギリシャ語などの古典語の時制やモード、孤立・屈折・総合などの動詞構成法の類型、語彙内部の差異などである。すなわち「内的言語形式」は、言語構造の全ての要素に関わって言語一般の構造の内部に存在して、外的言語形式と不可分に結合する。

## 2. 「深層構造」と「論理形式」

「深層構造」について考える前に、前提を二つ置く。一つは言語記述のレベル、他は句構造文法である。共にノーム・チョムスキー(1928~)が「深層構造」を理論化する以前に博士論文『言語理論の論理構造』*The Logical Structure of Linguistic Theory* (略称: LSLT, 1955/6, 1975 Plenum Pr. 刊行)で詳論した理論的前提である。

### 2. 1. 理論の前提

## (1) 言語記述のレベル

1955年の理論では次の6レベルが仮定されていた：

- (1) 音素レベル phonemes (Pm)
- (2) 形態素レベル morphemes (M)
- (3) 語レベル words (W)
- (4) 統語カテゴリーレベル syntactic categories (C)
- (5) 句構造レベル phrase structure (P)
- (6) 変形レベル transformations (T)

個々の言語の要素をこれらのレベルに割り当てることは決して易しくない。例えば、日本語の動詞の形態では形態素レベルと語レベルの単位が結合して混在する。また最後の変形レベルは後の理論の発展で極度に小さくなって、現在の生成理論では「併合 merge」に置き換えられた。上のレベルについて論議すべきことは多いが、ここでは提案されたレベルの種類をかかげるにとどめる。

## (2) 句構造文法

句構造文法は句構造の派生規則の体系であって、初期要素S (Cの要素) から、その構成要素を派生 (生成) する。規則の一般形は、XからYとZとが派生することを、 $X \rightarrow (Y, Z)$  のように書く。逆に見ると、YとZからXが出来ているという構成要素による分析的な構造を記述したことになる。これは、1950年代までに開発されてきた構成要素分析に基づいた構成要素分析の方法をいわば逆立ちさせただけのように見えるが、そうではない。理念が言語生成へと転換されている。ヒトがひとつのまとまった思考内容からひとつの言語表現を生成しようとしている。その言語表現のまとまりをいまSとすると、語Wや形態素レベルMの要素を文法の規則に従って配列する。そのためにSを分節する。分節の一般形は最初 (名詞句NP, 動詞句VP) のように仮定された。これらはともに統語カテゴリーCの要素である。これらのカテゴリーはさらに分節されて、最終的には語Wと形態素Mの要素に転換される。これに音声形式が与えられて言語表現として成立する。チョムスキーが最初に示した例<sup>\*1 2</sup>をあげる：

### (1) (a) PS-rules

(i) *Sentence*  $\rightarrow$  *NP* + *VP*

(ii) *NP*  $\rightarrow$  *T* + *N*

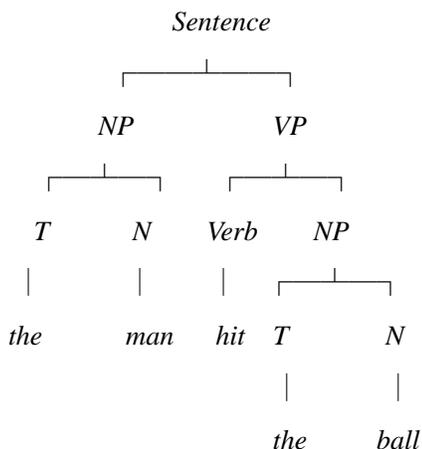
(iii) *VP*  $\rightarrow$  *Verb* + *NP*

(iv) *T*  $\rightarrow$  *the*

(v) *N*  $\rightarrow$  *man, ball, hit*

(vi) *Verb*  $\rightarrow$  *hit, took, etc.*

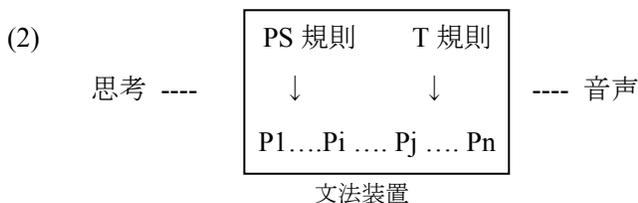
### (b) diagram (tree)



(1b) の樹形は、文 the man hit the ball の語彙要素が末端に入っているので、この文の過不足ない句構造である。

## 2. 2. 句構造連鎖

上の例文 the man hit the ball は受け身にすると the ball was hit by the man になる。この文にも固有の句構造が (Pn) 指定されるが、(1b) とは違う。(1b) と Pn とをつなぐのは受動変形と呼ばれた文法操作であると考えられた。この変形 (T レベルの要素) によって二つの句構造は結ばれる。句構造は最後に音韻的解釈を受けて、音声形態に転換されて文法装置から出力されると考えられた。このとき最初の句構造から最後の句構造に至る句構造の連鎖が作られる。それぞれの連鎖を繋ぐのは変形操作であると考えられていた。文は文法装置からの出力である一方で、この装置への入力は何を作る思考だと考えられてきた。このようにして文法装置は入力に文を作る思考、出力に文の表現である音声とによって囲まれる。文法装置の内部は、句構造規則によって作られる句構造が変形規則によって結びつけられて連なっていると考えられてきた。この様子を簡略化して示すと次のようである。



ここで句構造 P1 は思考が言語化されて思考単位が語彙に変わり句構造の末端に張り付いた構造とされる。また最後の Pn は全ての文法規則が適用されきって、過不足ない音声的解釈が可能になった句構造であるとされた。

## 2. 3. 「深層構造」の位置

「深層構造」という考えをチョムスキーが文法の中にきちんと取り込んだのは *Aspects of the Theory of Syntax* 1965 MIT (安井稔訳『文法理論の諸相』研究社 1970) だった。それによると、個々の文すべてについて文法の統語部門は「深層構造」と「表層構造」を特定しなければならないが、「深層構造」は文の意味的な解釈を、「表層構造」は文の音声的な解釈を決定するものであるという (§ 3)。つまり「深層構造」は意味的解釈を受けるべき、文法の統語部門からの出力であるという。従って、それは、意味論的解釈のために必要な情報を過不足なくもっている句構造であることになる。その句構造は (1) 語彙要素がすべて付与されている、(2) 意味論的解釈を決定する位置にある。従って、上の図(2)の句構造連鎖では左端の思考に最も近い位置にある句構造であるから、それは P1 である。ここから「深層構造」の基本的な特性がはっきりする：

(3) a. 「深層構造」は単一な統語的句構造 (P1) であり、

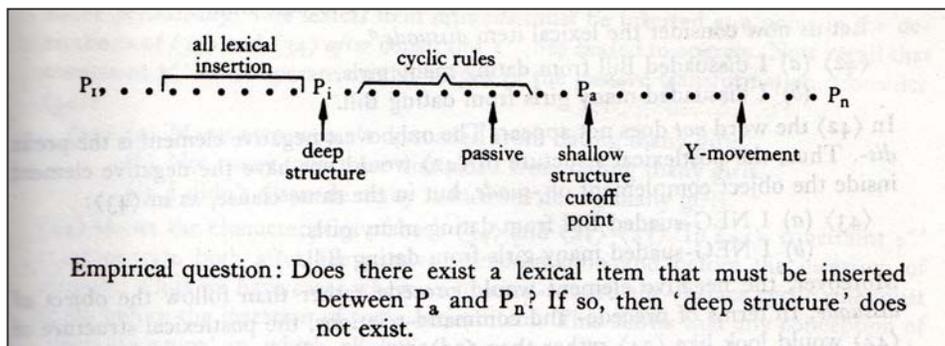
- b. 語彙要素がすべて付加されていて、
- c. 意味解釈への出力であり、
- d. 「表層構造」に向かう統語操作への出力でもある。

こうして、「深層構造」とは何かという間に端的に答えるとなれば、それは文法内部にある文の意味構造であるということになる。但し、これはチョムスキーたちが1965年前後に考えていた思想をおおまかにまとめたものである。そしてこの考えは1967・1968年頃から内外からの理論的批判にさらされてきたが、そのなかで彼自身の一番親しい研究者仲間からの最初の批判が今日なお尾を引いているほど深刻なものであった。以下に重要な批判的論点を概観する。

## 2. 4. 「深層構造」批判

最初の批判はチョムスキーの同僚たちからやってきた。激しいペーパーのやりとりがあって、その多くは謄写印刷で配布されたものだったが、その中で後に印刷されて残ったものもある。そのうちのひとつが、Goerge Lakoff: on generative semantics 1968? \*1<sup>3</sup>だった。そのなかで彼は「深層構造」の左に語彙が挿入されていない句構造の連鎖があると主張した。

(4)



この図の句構造連鎖  $P_1 \sim P_n$  できりわけ注目すべきは次の点である：

- (5) a. 「深層構造」は  $P_i$  とされ、最初の句構造ではない、それは語彙付加が完了した後の句構造とされている、
- b. 「深層構造」 $P_i$  のまえに一群の語彙挿入規則が仮定されている、つまり語彙挿入が文法構造内部の規則であると主張されている、
- c. 変形規則が循環的 cyclic に適用された後の句構造が浅い句構造 shallow structure と名付けられ「表層構造」 $P_n$  の前に仮定されている、
- d. 移動規則 Y-movement を適用する一連の句構造連鎖が指定されて、図の下に「この規則の適用で語彙挿入があれば、深層構造は存在しない」と主張されている。

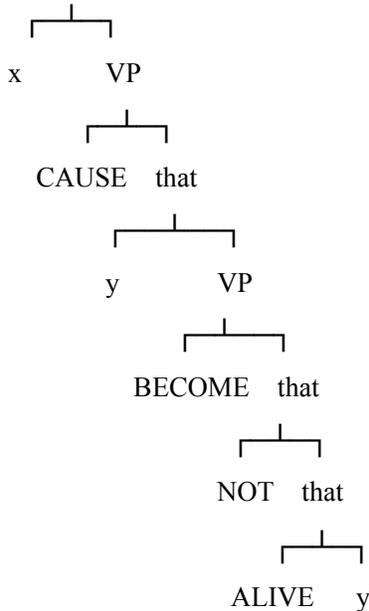
これらの問題点のうち(5d)のいう語彙挿入が必要なことが demand/claim などの動詞が支配する複文構造の事例で実証されている。この論議は、その後 20 年の間に変形規則が次第になくなって、要素の移動と併合 merge という文法操作だけが認められるようになってから、再び理論の内部に復活するのだが、Lakoff のこの論議を参照することはほとんどなかった。この論点はここでの当面の問題にとっては副次的なので、「浅い構造」の問題とともに論議を割愛する。

従って問題は(5a,b) の 2 点になる。このうち「深層構造」が語の付加された句構造であるという点(5a)は従来の規定と変わらないので、問題は (5a) のような「深層構造」のまえに語彙が付加されていない句構造を仮定するかどうかに限られる。「深層構造」の前にある文法操作は、図 4 の左上に書かれているように語彙挿入 lexical insertion (変形) と言われた。この操作には、それを受ける句構造 P-1a と語彙が挿入された句構造 P-1b を仮定しよう。その代表的な例として James D. McCawley が 1968/69 年に提案しているいろいろなところで話した kill-挿入変形をあげる。

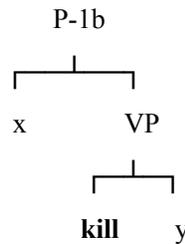
(6) a. x kill y

b. x CAUSE that y BECOME that it does NOT the case that y is ALIVE

c. P-1a



lexical insertion



(J.D.McCawley 1968-69 のアイディア) \*14

ここで語彙内部構造の表示に現れる CAUSE, BECOME, NOT, ALIVE などの述語は諸言語に共通の意味論的要素と考えられた。従って、句構造 P-1a も諸言語に共通の意味構造であることになる。それが英語では kill という音形をもった語に転換されて、英語の句構造文法操作が始まるというのである。この考えの基底には、意味の構造と統語構造とが同型 homomorphic であるという哲学があつて、双方を同じ句構造で記述することが言語の知的部分の表現にとって適切であると考えたのだった。これが生成意味論からの「深層構造」批判の要点である。

一方で、1970年代後半以降に変形操作に関する研究が大変進んだ結果として表層構造を派生する出発点の構造がさらに抽象的であると考えられるようになった。とりわけ表面に現れない要素を含む構造を派生の前提としなければならないと考えられて、句構造派生に抽象的カテゴリーが要求されるようになった。この研究の段階で「深層構造」という派生の段階はより抽象的であるとされて、そのような構造が基底構造 *underlying structure* と名付けられて、そこでは理論が要請する構成要素間の関係がより一般化された句構造によって表示されるようになった。変形論者の研究によっても、こうして「深層構造」は脅かされてきたものであった。1980年代になるとピサのセミナー後にまとめられた研究 *Lectures on Government and Binding* 1981 SGG-9 安井・原口訳『統率・束縛理論』では統語操作の原理がさらに少なく抽象化された。その後十数年を経て国際的研究の成果が *Minimalist Program* 1995 MIT, 外池・大石訳『ミニマリスト・プログラム』では変形操作に変わって併合操作が導入されて、それに媒介される基底の構造は LF (論理形式) に置き換えられ、それに応じて『表層構造』は PF (音声形式) とされた。これらはそれぞれ言語機能 *Language Faculty* をかこむ言語外の「思考システム」と「調音聴覚システム」のインターフェースとなる文法部門とされるにいたった。

このように「深層構造」は生成意味論によって言語の外に持ち出されただけではなく、変形論の理論的發展の過程で抽象的な構造体に置き換えられた。それは今日では「思考システム」とのインターフェースをなす句構造的表示とされている (次ページの図<中島平三>参照)。

## 2. 5. 「深層構造」は普遍的か

チョムスキーは「深層構造」が全ての言語に共通であると考えていた<sup>\*15</sup>。彼の著書 *Cartesian Linguistics* 1966 (川本茂雄訳『デカルト派言語学』) では「その意味を表す深層構造は全ての言語に共通である、それは、思考の諸形式の単純な反映だからである。」と書いた。この文の解釈には二通りある。一つは、文法にはかならず「深層構造」が存在するという解釈で、全ての言語の文法には文の意味を表示する形式構造が在るという。つまりそれは普遍文法に内在する構造体であると解釈できる。いまひとつは、或ることがらを表す文はさまざまだが、その意味を表す思考の形は全ての言語に共通であり、それが「深層構造」であるという解釈である。彼の意図したのはこの第二の解釈であろう。

第一の解釈では、ヒトの言語の文法には「深層構造」というべき部門が組み込まれているという生物学的種の特性に言及した発言と解釈することができる。この場合は「深層構造」の存在についての言及であり、ヒトの言語構造の構成のもつ多くの特性のひとつであるという。このとき、「深層構造」の内部については発言されていない。それはちょうどヒトの言語構造内部には何らかの形式の多元的構成の句構造文法やそれを一元的な音声形式に転換するメカニズムが組み込まれているという考えと平行である。つまり文法の構成に関する論議である。「深層構造」の性質に関する論議ではない。

一方で、第二の解釈は「深層構造」の内部の性質に関わる。まず、「深層構造」とは、きまって或る特定の文の「深層構造」であるので、それはその文の表現することがらについての言語知識である。上の文の考えでは、この特定の言語知識が全ての言語に共通であるという。例えば「イヴは旅立った」という

イベントを表す言語知識は何語でも共通だというのである。ここで問題が二つある：

(1) ことがらに対応するこのような共通の言語知識には、それをどのような形式で表示するにせよ、まだ特定の言語の語彙は入っていないはずである。仮にそこに抽象的な語彙が入っていたら、それを含む統語構造はいつかまた語彙の交換をしなければならない。かつて1980年台に機械翻訳のための便宜上モニターギュ文法などの論理語を入れた構造が作られてことがあった。一定の統語的処理が終わってからその論理語を目的言語の語彙に置き換えるためであった。しかしそのような入力構造にあった抽象的論理語彙に似たものを「深層構造」の入れるわけにはいかないだろう。ここに生成意味論が「深層構造」の存在を否定して、一連の語彙操作を句構造連鎖の過程に求めた理由があった。しかしチョムスキーがこの頃に思い描いていた「深層構造」には個別言語の語彙が入っていたので、それが全ての言語に共通な意味的構造をもつと考えたのは、やはり誤りであった。論理主義的な偏向とでも言うべきだろうか。

(2) 「深層構造」が普遍的であるかどうかという論議があった\*16。上の第二の解釈によると、「深層構造」がある個別言語の文の意味的構造の表示であるという規定からして、それが普遍的であるかどうかという論議は、もともと問題にならない。或る文の意味が普遍的であるはずはないからである。チョムスキー自身も「深層構造」の普遍については語っていない。或る文の意味の抽象的構造が「全ての言語に共通だ」と誤って主張したのであって、彼のいう言語普遍性とはもともと論議の場が異なる。従って、「深層構造」の普遍性云々はただの見当違いであった。

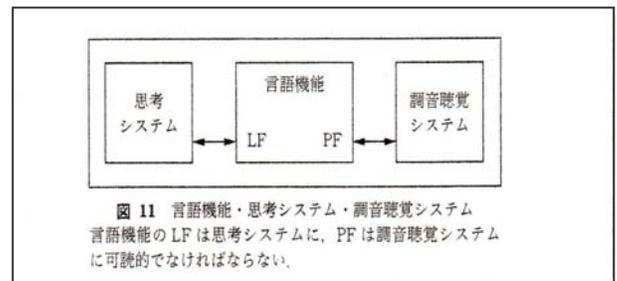
## 2. 6. 論理形式 LF

『ミニマリスト・プログラム』で提起された文法の構成は簡単に図式化すれば次のようである（中島平三「統語論」『言語の事典』朝倉 2005 p. 80 から）：

この言語モデルには文法の本体である「言語機能」の内部に論理形式LFが含まれている。しかし論理形式が実際にどのように書かれるかはいまのところよく分からない。チョムスキー自身を含めて多くの研究者はそれが抽象化された句構造による基底構造と同じ形式か、あるいはそれに意味論的解釈をほどこした表示と考えているのではないかと思う。要は、言語機能を取り囲む左右の認知システム、思考システムと調音聴覚システムのうち左から接する思考システムが読めるような形式でなければならないとされる\*17。

### (7)文法の構成

一階論理学や類似の論理表記はもちろん句構造的表示に読み替えられるので、この種の表記による形式化ではさまざまな言語知識や情報が階層的にモジュールを作って結合していてもよい。問題はむしろ意味的な単位と言語的形態とがうまく合わないことである。この二つを過不足なく置き換えるのは容易ではない。インターフェースの両側で形式の組み替えをする必要がある。



次章では、ここで生じる問題にふれる。

### 3. インターフェースの内と外

上図 (7) には文法の本体言語機能の左右に思考システムと調音聴覚システムの二つの非言語的部門がある。右の調音聴覚システムについて考えるべきことも多いが\*18、ここではその論議を割愛して、もっぱら左の思考システムとのインターフェースについて考える。

#### 3. 1. 論理形式 LF の要素

論理形式LFは抽象的句構造で構成される。要素間には支配の関係だけが成り立つ。要素には抽象的カテゴリーTOP, VP, Specなどが含まれるほかに、個別言語の形態素に転換されるべきtense/aspectなどの要素が含まれる。さらに抽象的な句構造の終端記号として個別言語の語彙が入る。これには自立語も非自立の形態素とそれらの組み合わせが含まれる。さもないと、論理形式LFに意味が付与できない。つまりかつてformativesと名付けられていた全ての統語要素と語彙要素が含まれる。また補助的に特性が書き込まれることもある。これら全ての要素が思考システムに過不足なく読み取られるような形式に順次に転換されながら論理形式に変えられていく。従って、論理形式LFには、或る文に固有の(1) 統語形式、(2) 統語標識、(3) 特性標識、(4) 語彙要素が含まれる。これらの組み合わせで文の意味が過不足なく表示されなければならない。そしてそれが文法の境界を越えて、思考システムによって過不足なく解釈されなければならない\*19。

それぞれについてわずかコメントする：

##### (1) 統語形式

論理形式の構成に必要なのは生成力の強い統語形式であるので、一般化された句構造 PSG が必要である。従って、統語要素間には支配の関係が成り立つ。同時に、これまでの理論的發展からすれば、移動変形と併合操作とが必要である。

##### (2) 統語標識

従来提案されてきた統語標識に加えて、抽象的な部分構造を導く統語構造を許す必要がある。例えば、テンス・アスペクト計算を導入するための統語標識が併合操作によって付加される。

##### (3) 特性標識

意味的解釈に必要な言語知識の表示に特性標識がよく使われる。統語標識に付加されることも、語彙情報を特殊化するために用いられる。フィルターおよびパラメーターに用いられるが、その使用規制を一般化する必要がある。

##### (4) 語彙要素

すべての形態素を含む。このために部分構造がいくつものモジュールを作って肥大することもある。屈折要素や動詞複合体などは部分構造になる。しかし形態素の合成をひとつの句構造の部分構造によって行うのは難しいが、句構造形成がきれいに行われるような処置が必要である。

### 3. 2. 語彙分解

語彙分解lexical decompositionは、典型的に上記の(6)、つまり1968年ころに生意味論が主張していた語彙挿入以前の句構造である。この方法の基底にあったのは、言語の統語構造と意味の構造とは基本的に同型homo-/iso-morphicであるはずだという信念であった\*20。この思想にもとづいて生成意味論では意味の構造を句構造で記述しようとした。従って、それを句構造派生のどこかの段階で個別言語の語彙に変換しなければならない。つまりこのモデルでは語彙挿入変形操作が必須とされた。論議の過程で、その語彙挿入が句構造派生の多くの段階で必要であることが明らかになり、語彙挿入操作に根本的な疑問を投げかけたのであった。生成意味論の破滅は言語記述方法論の選択に関わる重要な決断の結果だった。

しかし語彙分解の方法は二つの分野で生き残った。一つは機械翻訳計画の分野で、もう一つは動詞語彙の意味的分類の分野だった。第一の機械翻訳計画の分野では、個別言語の語彙を入れ替える必要から、それを間言語的な抽象語彙に置き換えなければならない。いきおい、それを分解して意味論的要素の複合体に変換して、そこから個別言語の語彙の意味を選択的に再構成するという方法がとられた。そのため最も有効な操作手段とされたのがモニターギュ文法だった。1980年代の機械翻訳プログラムにはこの方法を用いた意味記述を機械にのせて間言語的な処理に使うものもあった。その他のプログラムではPrologなどの言語に個別言語の語彙をそのままのせて使っていた\*21。従って、後の場合ではラムダ計算も語彙分解もなくすまされた。

生成意味論的な語彙分解の方法が生き残ったのは、むしろ動詞の意味分類だった。ヴェンドラー Vendler 1967 の動詞4分類 (statives, activities, achievements, accomplishments) を意味特性によって説明するのではなく、CAUSE, BECOMEなどの抽象的述語をあたかも意味論的要素semantic primitivesのように組み合わせさせて使って動詞の類型的意味を表そうという試みが現れた。代表的なのはDowty 1979であった。それをJackendoff 1983などがことごとげventsの概念構造の記述に使うことによって概念構造の形成規則を提示した。これらの記述方法が影山太郎らのお手本になる。またプステヨフスキー Pustejovskyはかつて機械翻訳に関わって語彙の意味特性を記述しようとしていたころから、意味特性のモジュールで語の意味を記述しようとしていたが、概念構造の記述にもその方法と語彙分解とを組み合わせようになっている\*22。

語彙分解の方法が生成意味論に始まったことには深刻な意味がある。分解された語彙要素は統語的に構成されて派生の或る段階で語彙に変形される。例えば、 $x \text{ CAUSE}(\text{BECOME}(\text{NOT}(\text{ALIVE } y))))$ を $x \text{ kill } y$ に変形するのである。生成文法の代表者たちはこの変形の多くが「深層構造」の前に起こると考えた。では「深層構造」という句構造が消滅したいま、それはどこで起こるか？仮に図(6)のモデルが原則的に正しい、つまり言語構造の実体を反映しているとすると、答えは、論理形式LFの内部で起こるか、「言語機能」の外側、つまり「思考システム」の中で起こるかのどちらかになる。もし論理形式LFの内部で起こるとした場合、語彙分解に導入された意味論的要素らしく考えられたCAUSE、BECOMEなどの抽象的動詞は、文法の要素であるはずであるが、これは個別言語の語彙でもなく、抽象的カテゴリーを含む統語標識でもなく、統語的な特性標識でもない。従って、それらは論理形式LFの要素ではない。だから語

彙分解構造は論理形式LFのかなでは起こらない。或る文の統語形式がどんなに論理形式LFに接近して構成されても、語彙分析構造は出てきてはいけない。それは意味論的解釈の表示であるにすぎないからである。つまりこの表示はあくまで「思考システム」の話であって、論理形式LFにとっては読み取り可能な思考形式であるにすぎない。語彙分解は「言語機能」の左外側の非言語的要素である「思考システム」の内部の話だとされてきたのだろうか。生成意味論では、句構造が左に連なって、語が「深層構造」の前に挿入されるというのであるから、彼らにとってこのインターフェースは存在しなかった。文法が語彙挿入を含む一連の句構造連鎖を生成すると考えたからである。では今日の語彙分解論者はどう思っているだろうか。それをイベントの形式論理的な記述であると考えている人達がいる。例えばプステヨフスキー 2000 などである\*<sup>23</sup>。イベント、つまりコト・モノの形式論理的記述は意味特性モジュールと抽象的述語の組み合わせによるのが一番すなおだから、語彙分解的な述語と疑似統語的構造を援用することは不可能ではない。但し、それが許容されるのは記述が句構造か述語論理に過不足なく翻訳可能であるという条件を満たしていればである。つまり論理的検証logical verificationが保障されていけばの話である。このような条件を満たしている限りで、語彙分解方式によるイベント記述は合理化できる。但し、記述対象が言語外事象であり、その方法が言語学的意味論onomasiologyではないことを宣言していなければならない。問題はむしろ概念を言語学的に記述しているという無分別であろう。

### 3. 3. 言語外事象の記述

イベントの記述にはいくつかのすぐれた先例があり、それぞれに地道が成果をあげてきた。例えば、1970年代末からのハンス・カンブHans Kampと彼の同僚の仕事では時間の形式論理的記述がある。このグループの一人であるオクヴィストLennard Åqvistはイベントの時間的類型を提案したことがある\*<sup>24</sup>。これらは「思考システム」内の時間関係の記述の典型的な成果であると見なしてよいだろう。

オクヴィストの論議では、およそイベントの時間的経過は14類に分類できて一つづつのイベントの開始と終結が開閉いずれかの定まった値を持つとされる。これは非常に強い普遍的モデルであって個別言語はこれらの種類のうちのいくつかを選択し、それを別の特性で細分化すると考えられた。その簡略化された図式Åqvist 1978, p.189を示す(次ページ(8))。このイベントの時間的経過の類型は一般化された普遍であって、言語から抽象したものではない。個別言語はこの一般的土台から任意に自分用に一連のイベントの過程類型を選び取って使う。このイベントの過程類型一覧は個別言語用の「釣り堀」のようなプールである。イベント過程類型(8)は言語外の世界であり、このいくつかを言語化したものが「状態性、瞬間性」などの動詞の時間的意味をつくる。こうしてイベント過程類型は言語内に転移、つまり言語化される。言語化のとき、個別言語はイベント過程類型からつまみ食いをするので、言語ごとに言語化の仕方が違ってくる。これはちょうど個別言語が普遍的な音声実質から自分用に音的特性の束をつまみ取りして自分の音韻体系を作り上げるのに似ている。いわばイベント型の盛り合わせから個別言語が自分の分を摘み取りするのであるから、個別言語ごとに摘み取り方が違って当然である。signifiéが言語ごとに違う理由がここにもある。

#### (8) イベント過程類型一覧

時間の論理モデルについても同様な見方が可能である。物理的時間には線条性、周密性などの基本的特性がある。しかし言語の時間には特異なひとつ時間が含まれている。それは発話時間  $t_0$  で、この特殊な時間と何らかの関係を持たないような時間表現はない。言語は時間モデルの要素から自分の好きなものを選び取って言語化（ここでは「文法化」が適切だろう）する。言語外的な時間モデルに発話時間という要素だけを編入して、言語の時間関係を記述する試みが古くからあった。近くはロマン・ヤコブソンが発話時間と何らかの関係をもつ時間表現を「絶対時間」、発話時間と関係を取り結んでいない時間関係を「相対時間」と呼んで、いくつかの言語の時間表現を記述したことがある\*25。いわゆる時制が表す時間

Form no.	Event	Complementary event
I	$\xrightarrow{[ U ]}$	$\xrightarrow{[ -U ]}$
II	$\xrightarrow{[ U ]}$	$\xrightarrow{[ -U ]}$
III	$\xrightarrow{[ U ]}$	$\xrightarrow{[ -U ]}$
IV	$\xrightarrow{[ U ]}$	$\xrightarrow{[ -U ]}$
V	$\xrightarrow{[ U ]}$	$\xrightarrow{[ -U ]}$
VI	$\xrightarrow{[ U ]}$	$\xrightarrow{[ -U ]}$
VII	$\xrightarrow{[ U ]}$	$\xrightarrow{[ -U ]}$
VIII	$\xrightarrow{[ U ]}$	$\xrightarrow{[ -U ]}$
IX	$\xrightarrow{U = T}$	$\xrightarrow{-U = \emptyset}$
X	$\xrightarrow{U = \emptyset}$	$\xrightarrow{-U = T}$
XI	$\xrightarrow{[ U ] [ U ]}$	$\xrightarrow{[ -U ]}$
XII	$\xrightarrow{[ U ] [ U ]}$	$\xrightarrow{[ -U ]}$
XIII	$\xrightarrow{[ U ] [ U ]}$	$\xrightarrow{[ -U ]}$
XIV	$\xrightarrow{[ U ] [ U ]}$	$\xrightarrow{[ -U ]}$

関係は基本的に絶対時間の要素であり、一方で、いわゆるアスペクトは相対時間に関わる。いまコトが起きる時間を  $t$  で表し、この時間と発話時間  $t_0$  との関係を見ると、次の5種類になる：

- (9) a.  $t_0 < t$  (これからコトが起きる)
- b.  $t < t_0$  (コトはもう起こった)
- c.  $t_0 = t$  (コトはいま起こっている最中だ)
- d.  $t_0 \leq t$  (コトはいま・これから起こる)
- e.  $t \leq t_0$  (ことはいま・もう起こった)

これら時間関係のなかから、日本語は(9b)と(9d)、ニヴフ語は(9a)と(9e)を採り、それぞれ(9b)と(9a)とを有標の時制とする。つまり

- (10) a. 日本語：-タ (有標)  $\rightarrow$  (8b)  $t < t_0$ ; -ル  $\rightarrow$  (8d)  $t_0 \leq t$
- b. ニヴフ語：-ny (有標)  $\rightarrow$  (8a)  $t_0 < t$ ; - $\phi$   $\rightarrow$  (8e)  $t \leq t_0$

ここでもまた(9)は、絶対時制諸関係の泳ぐ「釣り堀」であり、個別言語はこの関係の中から(10a, b)のよ

うにおのがじし特定の関係を選び出して、自家葉籠中のもので使う。絶対時制関係はまだ言語外の事態の世界に在り、それが形態素と関係づけられて、その形態素の意味になる。しかしこの段階ではまだ文脈的な修正は効いていない。例えば、「発見の夕」、「現前の夕」といわれるような文脈・発話状況の干渉は考慮されていない。これらの用法は基本的な意味(10a)から文脈的に派生する、いわば(9)に乗って文脈に運ばれる。第一にコトの世界と言語の世界との間にあるインターフェースで基本的な意味が規定される。次いで、この問題では、文脈・発話状況に依存して意味が分化する\*26。

#### 4. 意味の類型論

言語機能システムとそれを左右に囲む思考システムと調音音声システムの間には二つのインターフェースがあった。ここではもっぱら、左のインターフェース、つまり「思考システム」と「論理形式 LF」とのインターフェースを考えてきた。いま最初に提起した問題点、つまりフンボルト以来長く無視されてきた意味の個別言語的な多様性について考えるとき、おそらく重要な方法論的な視点がひとつある。それは、このインターフェースを問題にするとき、どちら側からアプローチするかである。ハンス・カンプのグループは少なくとも部分的に実在論的 *ontologisch* だった。彼らは実在の側のことがらをまず形式的に記述しようとして、ある程度それに成功した。しかしその時もわれわれはインターフェースを渡り歩くときにいつもびくびくしていた。イベントの形式的記述から言語への歩みが *salto mortale* にならないかということごとに心配だったからだったからである。当時は「思考システム」の部分構造を大きく形式論理的に書くことに集中した。その好例が上にあげた Åqvist 1978 だった。しかしこの実在理論を個別言語の分析に使うには、相応の手続きが必要だった。その煩雑さは金子亨 1995 に見るとおりである。

一方でこのインターフェースには右からアプローチする方法がある。統語構造の分析から論理形式 LF に近づき、言語の境界を越えて思考システムの構造に踏み込む方法である。この境界をいとも簡単に乗り越える人々がいる。それが言語哲学者の一群で、あえてあげれば、ヴェンドラー-Zeno Vendler やサール John R. Searle などである。彼らはいわばこのインターフェースを高見から俯瞰して、両側にまたがる概念と構造を論議の俎上にほうりだす。ヴェンドラーの動詞 4 分類 (1967) がその好例である。言語学者はその跡をおたおたと追いかけて、やっとな *telicity, activity* 等の思考システム的な概念をつかみ出すという始末である。言語学者は普通ちまちまと個々の言語表現の意味の分析から仕事を始める。その多くの場合に、インターフェースの左の世界についての言及がない。国弘哲弥等『ことばの意味』I (1976), II (1979), III (1982) 平凡社 に見られるようである。この方法は同一言語内部の言語知識表現と類語の意味との配置状況について優れた情報を提供するが、インターフェースの左の思考システムとの関係解明を予定していないので、そのなかにひとつの対応点を穿つにとどまる。従って、意味の類型に一例を与えるだけである。ではどうすればいいか。

##### 4. 1. 語彙の意味の場

理性の領域におけるいくつかの語彙の意味の史的推移を正確に記述した意味論的研究が注目を浴びたことがあった\*27。ヨスト・トリーア Jost Trier がその一例であるが、彼の記述自身は優れたものであった

が、この研究の意図も方法もその後の時代の潮流に埋没した。彼によると、語彙は場を作る、場を構成する語彙は意味の領域を分け合って住み分けているが、或る語彙の意味に変化が起こり、それが場全体に波及する。その変化は次の時代の場の意味的構成に変化を起し、新しい住み分けを作るにいたるとい過程を3語の意味的な史的推移によって論証した研究であった。しかし語の意味が隙間なく隣接して張り合っているような場が遍在するというのはおそらくフィクションであろう。またすべての概念の領域を語彙が均等に埋めているとも考えることはできない。むしろ概念と意味が占める知識の領域はほんらい穴だらけなのだろう。そこには生態的な生活の必要が原理として貫徹していると考えるのがむしろ実体に即している。そのような例をニヴフ語からひとつとってみる。

次はニヴフの漁労語彙の中の10語である\*28。



考えるべき問題をいくつかあげる：

(1) これら語彙の場は「魚採り」で、その一般的な表現は(10a) co-ŋəŋdʲ (魚を捕る)。これは「獣採り」ŋa-ŋəŋdʲ と対をなす。

(2) この語彙の場の要素は他にもある。例えば、rʰatʲ (岸から投げ釣りをする) (Puxta 2002-714) などの語を含む場の細分が必要であるが、ここでは上の三つの小分野だけを例にする。第一は方法別の漁の分野、第二が流水時の漁の小分野で、この民族の生活に即した語彙領域である。第三に転用語のうち、本来は別の行動の表示である語が漁の場に編入された一例を付け加えておいた。

(3) これらの語彙で本来的動詞は (10b) kʰerqodʲ (釣る) だけで、サハリン方言では kʰershkuɖ、ともに派生でも転用で合成でもないらしい。民俗として本当か何故かは考古学的考察が必要だろう。

(4) (10e) rindid<sup>ɗ</sup> (氷下釣りする) はイデオレクトかもしれない。また別形の rəndud<sup>ɗ</sup> (ルアー釣りする) は比較的新らしい解釈かも知れない\*29。

(5) 流氷時の語彙3語はどれも派生語である。このうち(10f) jilyud<sup>ɗ</sup> (融氷後に帰るように魚を捕りに行く) は、自動詞ilyd<sup>ɗ</sup> (?流水する) に-(y)u を接尾して他動詞化し、それに不定代名詞 j- を接頭して作った自動詞で、意志的動作主の項をひとつもつ。いわゆる非能格・非対格動詞である。いわば「それを流氷させる」とでもなろうか。

(6) (10g) k<sup>h</sup>ərɗ<sup>ɗ</sup> (結氷後に帰るように魚を捕りに行く) は k<sup>h</sup>ər (広い川の沖) を自動詞化した語らしい。語彙の慣用化の例であろう。また(11h) mu vəyid<sup>ɗ</sup> (結氷時に魚を捕る) は「舟を引く」からの転用で、本来は山をわたるときにも言える用法であるが、流氷時の漁という語域に入ったときには結氷した氷原に舟を引くことになるらしい。特定の文脈で特定の語域の要素として使った時にはその領域に適合した意味になるという好例である。同じことは(11i) k<sup>h</sup>eɟɗ<sup>ɗ</sup> (網立てする) にも当てはまって、名詞 k<sup>h</sup>e (網) の動詞化であり、この動詞はもともと別の行動に対する表現であるが、「漁」の語の領域に入ったときには、網を立てて漁をするの意味になり、漁労語彙に加算される。

このわずかの漁労語彙から見ても、いくつかの考えが湧く。第一は、語彙分析的な形式記述に耐えられそうなのはタイトル語の coŋəŋɗ<sup>ɗ</sup> (魚を捕る) だけである。この語はもともと抱合的合成語で前の構成要素 co- は「魚」、これは意味論的要素 (primitives) なので、どんな語彙分析にも具体的な概念として最後までついてまわる。また、語の第2構成要素 -ŋəŋɗ<sup>ɗ</sup> は「殺す」ではない。「食用に捕獲する」で、命を奪うことを含意する。この複合的な概念を記述し意味に仕立てなければならない。その記述の出発点を kill に相当する概念に置いて、それに意味的な修正を加えるか、それとも ŋəŋɗ<sup>ɗ</sup> を元素にして、そこから kill に相当する語を派生させる方法があるかもしれない。もし ŋəŋɗ<sup>ɗ</sup> を元素にしたら、CAUSE(BECOME(... には到底ならない。またニヴフ語には iyɗ<sup>ɗ</sup>/ k<sup>h</sup>ud<sup>ɗ</sup>/xud<sup>ɗ</sup>, mud<sup>ɗ</sup>, mugud<sup>ɗ</sup> など「殺す、死ぬ、死なせる」にかんする語彙が一群ある。これらと ŋəŋɗ<sup>ɗ</sup> とが構成する語の場とその意味的配分の見なくてはならない。いずれにせよこのような語彙の場の複合的モジュールを分析の前提とする必要がある。第二に、漁労の方法別の語彙は隣接した意味の分野を連続して対立的に表していない。彼らが使う主な用具の種類がこれらの動詞それぞれの元になっているようにみうけられる。生態的・生活的語彙分類である。もっとも、このなかで(11b) k<sup>h</sup>erqod<sup>ɗ</sup> (釣る) は派生ではないらしい。だとすると、このように割にせまい語彙の場も成り立ちが異なるいくつかの語彙がばらばらに集まっていることになる。一つの語の分野は、それぞれ語構成上の出自に関係なく、生態的・生活的な動機によって構成されていると見てよい。第三に、上の漁労語彙には流氷時の漁という状況設定がある。この状況でどうやって魚を捕るかについては、おそらく向こうにしばらく留まって海が明けてから帰るか、流氷を渡って帰るか、氷の上で舟を引いて行き帰りするかという選択があるのだろう。そのような漁の仕方に応じた語彙が集まっている。流氷という状況設定、そのなかでの仕事の仕方に応じて派生語と動詞句が群れを作る。状況依存的な語の集合である。この語の分野における互いの語の意味の対立は論理的配分というよりも状況対応的で生態的な配分である。第四に、(11i) k<sup>h</sup>eɟɗ<sup>ɗ</sup> (網立てする) がなぜ coŋəŋɗ<sup>ɗ</sup> (魚を捕る) の場に入るかについては、配分

上の問題がある。この語を(11c). taxtd<sup>ɪ</sup> (浮き網で魚を捕る、(11d) lørkud<sup>ɪ</sup> (流し網で魚を捕る)とともに「方法別」の分野にいれてもよいが、敢えて別立てにしたのは、別種の行動の表現が漁労語彙へ編入される事例を見たかったからである。ある語の場が成立しているときに、もともとは別の独自のイベントを表示する語がその場の成員として編入される、そうした例である。別の語のモジュールから延びた手がこのモジュールに届き、その成員として編入される当モジュール間連合による編入がおこる。このようなケースである。

以上のように、語彙の意味的な分野は次のような性質を持つようである：

- (12) a. タイトル語を頭にした複合的モジュール  
 b. 生態的・生活的な構成の離散的な語集合  
 c. 状況依存的・生活的な配分をもつ語集合  
 d. モジュール間連合による語の編入可能性

この論議はニヴフ語の漁労語彙の一部を見ただけなので、過度の一般化の誹りを免れない。しかし統語論の入力になる構造に語彙が詰まっているとすると、これだけのことは少なくとも心得ておかなければならないだろうし、そこには記述対象の言語のもつ生態的・生活的特徴が少なくともこのように息づいていることを知っておかなければならない。Signifié は一色ではないと知るべきである。

#### 4. 2. アスペクト計算

故オタイナさんが1983年に書いた「ニヴフ語の結果体と継続体」という論文がある\*30。この論文で彼女はニヴフ語サハリン方言の動詞接辞 -yəta-/-kəta-/-xəta-\*31 (語頭母音は前接の母音によって変化する) の意味を詳細に分析している。全体の思想は次のようである。(1) この接辞の意味は結果、完了、継続、反復などであるが、(2) どのような意味になるかは前接する動詞の意味と(3) その動詞の項との関係で定まる。(4) それぞれの意味が現れるには典型的な文脈があって、時間副詞などの補助的語句と共起することが多い。他にも重要な指摘がみられるが、この論文で肝腎なのは(2)、(3)の点である。とりわけこの結合でどんな意味が出るかは前接動詞の意味の形とこの接辞の意味の形とが協力して決めるという事実を具体的に例示してある点である。彼女の事例を極端に整理して見ると次のようである：

- (13) I a. mu- (死ぬ)、t<sup>h</sup>osq- (折れる) の類 + -yəta- → 結果性状態 (例：死んでいる)  
 亜種 firi- (隠す) の類と再帰形 + -yəta- → 結果性状態 (例：隠れている)  
 b. por- (横たわっている)、hurtiv- (座っている) の類 + -yəta- → 状態維持 (一ている)  
 c. polm- (盲目になる、一である) の類 + -yəta- → 状態性 (一である)  
 d. to- (泣く)、u- (燃える) の類 + -yəta- → 起動継続 (泣き出しちゃっている)  
 (II) e. əv- (持つ)、xe- (着る)、mə- (聞く) の類 + -yəta- → 所有結果状態 (持っている)

(III) f. vetau- (着せる)、tʰa-/rʰa- (焼く) など2項他動詞+*-yɔta-* → 受動結果態 (着ている)

g. ni-/in- (食べる)、ra- (吸う) の類の動作性2項動詞+*-yɔta-* → 初動間歇状態 (食べかけてある)

(IV) h. ay- (縫いつける) などの3項他動詞+*-yɔta-* → 結果状態 (項減少) (縫いつけてある)

オタイナさんはこれ以上の整理も形式化もしていないが、これだけでも *-yɔta* 結合の意味の違いが前接動詞の語彙アスペクト (aktionsarten と言ってもよい) に依存することは見て取れる。ここであげられた動詞類のなかで(13-I)の4類は自動詞であるが、主語の動作主性・意志性は弁別要因になっていないようである。特に(13-I d)の類には意志性有無の両種が含まれている。「能格性」という特性が効いていないのかも知れない。これは別に検討を要する。この類は他の点でも注目に値する。日本語継続動詞のテイル形でも起動継続が表示されるが、それはイベント開始直後の状況が表示されるからであったが\*<sup>32</sup>、これと同様なイベント開始相の結果状態が表示されるからであろう。(13-II)の類は2項動詞の結果相の表示である。ニヴフ語でもこの類の結果相が結果状態を表示して、その状況が+*-yɔta-*によってとりだされるものと見える。この状況を一般化して所有関係の提示と考えたようである。(13-III)の2項動詞は例示されている限りでどれも有意志性で、いわゆる能格的であるが、(13-III-f)と(13-III-g)との違いが*-yɔta-*との結合で有意味になる。前者は結果相を作り、後者は初動・間歇状況を表示する。その理由は(13-III-g)の動詞が動作状況の開始と終結を持つからだと思う。この対立をはっきりさせるには動作状況を形式的に明示しなければならない。またこれら2項動詞では*yɔta-*結合で動作主が消える。つまり第2項が格上げされるという。しかしともに絶対格なので、格表示は同じである。最後に、(13-IV)の類は3項動詞で、第3項は場所・方向を示す項である。この動詞の結果状況は、必ず動作主なしで表示されるという。日本語のテアル形とそこが違う。

さてオタイナさんの考えをさらに一般化して間言語的なアスペクト計算を可能にするには、第一に、前接動詞の語彙アスペクトを形式化する必要がある。第二に、接辞*-yɔta-*をさしあたり結果相表示のアスペクト形式と仮定して*-yɔta-*結合の第二構成要素とする。第三に、前接動詞の項関係を接辞*-yɔta-*がどう変えるかを考慮する。オタイナさんの資料では(13-II)と(13-III-f)では行為者の項を絶対格で表示することはできないという。これは分かり易い制約である。ここでは項関係の変更が義務的である。これは接辞*-yɔta-*が完了ではなく結果を表示する機能をもつからと解釈していいかも知れない。

このようなアスペクト計算は相対時間どうしの計算であって、そのかぎりでは発話時間 $t_0$ と結びついていない。その計算の結果が出てはじめて絶対時間と結合するという順序がある。従って、前接動詞が内包する時間関係を順次にそれに続くアスペクト接辞の時間と組み合わせ、項関係の変更を加えて最終的に発話時間との関係をつける。ニヴフではこの順序に形態素が並んでいるので操作は難しくない\*<sup>33</sup>。この言語ではこの順序で言語的な思考が展開するのではなかろうか。

#### 4. 3. 意味の類型の要素

以上ニヴフ語からのわずか二つの例から見ても、言語記号の意味の要素が個別言語によって違う形を持つことが分かる。それを仮に形式論理的に表示したとしても、個別言語的特性は明示されなければな

らないので、語彙の意味の表示はもちろん、アスペクト計算に参加する要素の結合も決して言語共通にはならない。従って、signifié は言語によって違う。この点にソシュールは気がつかなかったのではないか。フンボルトの言う「内的言語形式」の個別言語的特性の論議がここでは無視された。またチョムスキーが「深層構造」を言語共通（言語普遍とは違う）だといったとき、やはりこの問題を看過した。これも不思議な話である。論理主義的偏向なのだろうか。

意味の類型をつくるためにどのような要素を捉えるべきかについて、以上に考えてきた点からさしあたりの論点を整理しておきたい。

### (1) 語彙分解についての論点

生成意味論的語彙分解は今やせいぜい意味の説明の用にしかない。第一に、CAUSE, BECOME などの抽象述語は意味論的要素であるとは考えられない。イベントの成立とあり方に関するシュトットガルト・グループの研究成果（の一部）と比べると、イベント構成要素を捉えていないことがはっきりする（(8) イベント過程類型一覧参照）。第二に、語彙分解の表示では、要素の結合の様式が一階述語論理的方法に比べて幼稚である。例えば、項の量化がない。階層の無指定・無限性と階層内部の特性記述が不可能である。生成意味論では少なくともこの要素を句構造に組み込むだけの才覚はあった。しかし今日の語彙分析の方法には句構造の原理である支配階層が論議されていない。第三に、そしてこれが最大の欠点であるが、動詞的語彙の意味を中途半端にしか記述できない。例えば、(11) にあげたような語彙をどう記述するつもりか？ これができなければ、個別言語的な語彙特性を記述できる見込みは全くない。では何のためにこんなことをやっているのか？ いくつかの語彙概念的特性を得るためなのだろう。この方法が何かの役に立つとすれば、それは言語外的な意味解釈で語彙の意味の形を引き出すときに役立つ場合である。もっともそのときにも言語内的な基準によって対立の契機を捉えることが必要であるが、それはある程度行われている。インターフェースの左右を行ったり来たりしているのである。目指すべきは語彙のもつ「内的言語形式」を決めることであるが、それをきちんと行うには、抽象的操作概念、例えば、意志性 intentionality、動作主性 agentivity、起動性 inchoativity、終結性 telicity、継続性 durativity、結果性 resultativity などの形式的な動詞の意味構成要素を捉えなければならない。総じて、語彙分解は、語彙アスペクト (aktionarten) を決定するための言語外的操作としては使える。しかしそれ以上ではないだろう。

### (2) 個別言語的な語彙のモジュール

ニヴフ語の事例(11)で見たように、語彙は、生態的・生活的な視野でくくられた概念を言語化した離散的集合である。語彙は特定の領域に応じて集められている。その場がテンプレートとして機能して、集まった語彙に独自の特性を与える。上の例では、「流水期の漁」という場ができて、そこへ「舟を引く」というもともとは別の行動を表示する語を引き込んで、場のメンバーとする。この場が語彙の小集合のモジュールをつくる。動詞的語彙の意味の個別言語的な場を囲って、それに固有の「内的言語形式」を与えることは大変な作業であるが、意味の形の類型を捉えるには避けがたい仕事である。動詞だけではなく、名詞の類でも改めて眼を見張ることが多い。例えば、国立国語研究所の『日本語教育のための基

本語彙調査』1984 では体の類 4526 語のうち抽象的關係を表す語が 1233 語、17.9% もある。この抽象的關係の語彙が更に小さなモジュールを作って細分され、方向の表現だけでも 84 語に及ぶ。これらの抽象語彙でも個別言語的な特性が多く見られて、このような語彙の小集合の意味的特性を「内的言語形式」として取り出すことは難しい。図(7)の文法モデルを適用しても、これらの語彙が論理形式 LF の要素になる、つまり論理形式 LF は個別言語的偏差を担った語彙や形態素を取り込んだものである。だから、論理形式 LF なら言語共通だとは到底言えないことになる。この問題を解く鍵は、語彙の個別言語的な「内的言語形式」を記述することにある。つまり、それぞれの言語がどのように世界と世界の要素とを言語化しているかを生態的・生活的視点で形式化することに言語記述の成否がかかっている。

### (3) 形態素結合の個別言語特性

語根と接辞の結合でも個別言語的特性が表れることを上の(12) の例でみた。なかでも(13-I-c)の状態動詞と結果態形成接辞 *-yɔta-* との結合はめずらしい。また、能格・非対格動詞(13-III-g)との結合で起動的意味が出るのは難しくないが、ニヴフ語ではときどきそうなるという意味での間歇的表示が可能であるという指摘は注目に値する。完了や結果の接辞と結んだときに項関係の交替が起こることはよく見られるが、ちょうど日本語のテアル形と同じに、第二項(内項)が昇格したり(13-III)、三項動詞ではこの接辞との結合で項減少が義務的であったり、*j-i-/a-*他動詞との結合が排除されたりする(13-IV)というのはこの言語に固有の形態素結合形式の特性であろう。

このような状況を見ると、アスペクト計算にもまた個別言語型のゆれがあることが分かる。絶対格時制が言語外の客観的時間関係を選択的に言語化して、独自の個別言語の形態素に仕立てていることはよく知られているが、相対時間どうしの結合がやはり言語ごとに独自の意味の形を作っていることが分かる。アスペクト計算の「内的言語形式」が個別言語的に多様であるということになる。この問題の研究はこれからの課題であろう。

類似の言語間の違いは受動の形成でも見られて、この分野はいままでも注目を集めてきた。また使役の強制・自発の別について古くから優れた研究がある。しかし統合語 *synthetic languages*、複統合語 *polysynthetic languages* の接辞結合について、言語による意味とその結合のゆれについての研究は多くない。この分野の研究も、おそらくフンボルト自身が思い描いていたであろうように(『多様性』§ 17)、「内的言語形式」の個別言語的差異の典型的な事例をみせるだろう。

---

### 註

\*<sup>1</sup> : ウイルヘルム フォン フンボルト (1767-1835) 著『ジャワ島のカーヴィ語について』(1836) *Ueber die Kawi-Sprache auf der Insel Java* はプロイセン王立科学アカデミー刊全 17 巻のフンボルト著作集 *Wilhelm von Humbolts Gesammelte Schriften in 7 Bdn.* の第 7 巻として出版された。全集全体は実弟アレクサンダー フォン フンボルト (1769-1859) の監修であり、第 7 巻は A. ライツマン *Alfred Leitzmann* の編である。全集は 1968 年に W. de Gruyter 社からファクシミリ版で再版された。またそれより先 1961-1963 に Cotta 社から 5 巻もののフンボルト選集が出版された。この選集は考古学文献、政治文献など分野別に

著作を分け、第3巻が言語哲学論集である。しかしこれには『カーヴィ語』全体は含まれず、その序文だけが収められている。しかしこの『カーヴィ語』の序論「人間言語構造の多様性とそれが人類の精神発達に及ぼす影響について」Ueber die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluss auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts は本文 344 ページにのぼる大著であって、これだけが独立して 1909 年にやはりファクシミリ版で刊行されていたという経緯もあって、その後は序論だけが外国語に翻訳されることがむしろ慣例になった。Reclam社はこの序論をさらに縮め、それにいくつかの小論をくわえて『言語論集』を作って、レクラム文庫 6922 巻としている。便利な論集である。

序論はいくつもの外国語に翻訳されている。日本語訳は『フンボルト 言語と精神』と題して亀山健吉訳法政大学出版社 1984 である。過剰に説明的な訳文であって誤解を醸成する。薦められない。英訳が 2 種ある：George C. Buck & Frithjof A. Rawen 訳 Linguistic Variability & Intellectual Development, Univ. of Miami Pr. 1971。しかし後に Peter Heath 訳 On Language. The Diversity of Human Language-Structure and its Influence on the Mental Development of Mankind. Cambridge Univ. Pr. という直訳風の英訳が 1988 に出版された。ともにすぐれた訳本であって、原本を読むよりも分かり易いかも知れない。また Pierre Causat 訳編の Introduction a l'oeuvre sur le Kavi という仏訳が Ed. du Seul から 1974 年に出ている。詳細で丁寧な訳であり、書誌的に優れた編著である。またロシア語訳も 1984 に出版された。Г. В. Рамишвили 訳 Избранные труды по языкознанию,

Прогресс社刊である。これには序論の他言語学的小論 5 点が収められている。直接的で正直な訳である。総じて、英訳本を参照しながら原文を読むか、その逆がいい読み方と思える。

\*<sup>2</sup> この言語生成 *Spracherzeugung* をノーム・チョムスキーは 1965 年の著書 *Aspects of the Theory of Syntax* の序文で *linguistic generation* と考え、そのように訳して用いた。

\*<sup>3</sup> 金子亨「言語の起源」『言語の事典』（中島平三編）朝倉書房 2005, pp.544-559

\*<sup>4</sup> 一階述語論理からモニターギュ文法にいたる可能性がある。Prolog（中島秀之）タイプの記述がよく用いられてきた。一方、1960年代後半以降の生成意味論では句構造を意味の記述に用いて、さらにそれと形態統語的記述につなぐ方法が採られた。この方法と思想の誤りを指摘したのもチョムスキー自身だった。しかし語意記述の変形論的方法は未だに行われている。例えば、Jackendoffとそのエピゴーネンが用いる生成意味論もじりの表示がそれである。かれらは式のどこかに自然言語の語彙を挿入して問題を始末したつもりでいるらしい。

\*<sup>5</sup> 言語記号の意味的側面の個別言語的相対性はソシユール記号論では無視された。彼の記号論では言語が変わると *concept* も変わるとは少なくとも主張されていない。この論議が無視されてきたために、B. L. Whorfの思いつきに驚いて言語相対論とかいう大騒ぎがはじまったものであった。

\*<sup>6</sup> この考えはチョムスキーの言語普遍 *language universals* を生物的に解釈した論議とほぼ一致する。フンボルトの当時、句構造解析による諸言語構造の普遍探索はまだ存在しなかった。そのためにフンボルトはいくつかの文法的カテゴリー、名詞、代名詞、実詞（名詞+動詞）などの文法範疇が言語普遍に属することを暗示するに留まった。

\* 7 「総合体系」とはEinverleibungssystemの訳。今日の用語では(poly-)synthetic systemに対応する。Heath英訳、Buck/Raven英訳ではともにincorporative systemと訳されている。亀山訳日本語版も同様に「抱合の体系」である。ドイツ語の字句どおりのラテン語化はin-corp=o-ration（一体化）であるから、これらの訳が本来は正しい。しかしここでは「抱合」を特別な総合操作を指すためにとっておいて、あえてSapir 1920にならって「総合」を用いた。ここで「総合Einverleibung」とはフンボルトによると、主に動詞が次の操作を受けた場合をいう：(a) 複合語、(b) 接頭辞つきの語、(c) 言語内基語からなる接尾辞（サンスクリットTaddhita接辞）による構成、(d) 語幹および言語外の語から派生した語（Kridananta語）、(e) 文法的な動詞・名詞変化を受けた語（27節、原本p.125）。つまり広い意味での総合synthetismである。

\* 8 Heath英訳：inner linguistic form, Caussat仏訳：forme interne de la langue, Рамишвили：внутренняя форма языка。

\* 9 岩波版小林英夫訳1972（改訂第1刷）の表題を利用。Tillio de Mauro編Cours de Linguistic Générale, Payothèque, 1981によると、問題の語はそれぞれnature du signe linguistique; signe, signifié, signifiant, image acoustique, concept である。

\* 10 ここでは主客二元論を採る。認知対象の客観的実在とその内的な認知という二世界の実在を認めるという普通の捉え方に従う。そのために大森壯蔵哲学や認知的一元論一般およびクオリア万能「理論」に関する論議は別の機会に譲る。

\* 11 例えば、Ogden & Richard 1923の記号論（Ch. K. Ogden & I. A. Richard, *Meaning of Meaning*, Routledge & Kegan Paul）のいわゆる「意味の三角形」の用語では、referent 指示対象がモノ・コトであり、reference が言語内の指示、つまり言語的概念である。なお、記号はreferenceがreferenceを指示するrefer to機能をもつとされた。

\* 12 N. Chomsky, *Syntactic Structure*. Mouton 1957, p.26/27

\* 13 Lakoff, G.のOn generative semanticsはD.Steinberg/Jakobovits, L.A.: *Semantics, An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*. Cambridge Uni. Pr.1971 (1.ed), p.247 に所収されている。

\* 14 彼はさまざまな機会でペーパーとして配布したが、まとまったものは J. D. McCawley, Lexical Insertion in a Transformational Grammar without deep structure, in: *Proceedings of the Chicago Linguistic Society* 4. 1968 に収められている。

\* 15 問題の箇所は次のようである：Cartesian Linguistics 1966, p.35: "The deep structure that expresses the meaning is common to all languages, so it is claimed, being a simple reflection of the forms of thought...."

\* 16 典型的に田中克彦『チョムスキー』岩波 1983の「深層構造」理解である。特にこの本の第二章の論議はここであげた論理を誤解した結果である。早い時点で改訂が必要であった。思うに、1990年の再版は出版社が著者の品性を毀損した典型例である。

\* 17 比較的最近の例ではElizabeth Ritter & Sara Rosen: Even Structure and Ergativity, in: *Events as Grammatical Objects*, ed. by Carol Tenny & James Puskajovsky, CSLI 2000, pp. 187-238などが「ミニマリスト」タイプの基底構造表示によってLFらしい構造を表示している。

\*<sup>18</sup> 例えばメトリックの要素もこのインターフェースの中に含まれるのだろうか。少なくともそれを構成する原理とパラメータはなくてはならないと思われるが。

\*<sup>19</sup> ヒトの言語生成装置をとりまくインターフェースについて生成理論では上図 (7) の中島平三 2005、p. 80 の図が見やすい。

\*<sup>20</sup> Bar-Hillel, Johoushua: *Aspect of Language*, Jerusalem 1970 所収の諸論文を参照。特に *categorial grammar* に関するいくつかの論文など。

\*<sup>21</sup> 例えば、中島秀之『知識表現とProlog/KR』産業図書 1985

\*<sup>22</sup> Pustejovsky, James 1987: *An integrated theory of discourse analysis*, in: *Machine Translation. Theoretical and methodological issues*, ed. by Sergei Nirenburg. Cambridge、および P.J.2001: *Type Construction and logic of concepts*. In: *The Language of Word Meaning*. Ed. by Bouillon, P., & R. Busa. Cambridgeなどを参照。

\*<sup>23</sup> Pustejovsky, J.: *Events and Semantics of Opposition*. In: *Events as Grammatical Objects*, ed. by Tenny, C. & J. Pustejovsky 2000 CSL および岩本遠億『事象アスペクト論』開拓社 2008

\*<sup>24</sup> Åqvist, L. & F. Guenther: *Fundamentals of a Theory of Verb Aspect and Events within the Setting of an Improved Logic*. In: *studies in formal semantics*, ed. by F. Guenther & Ch.Rohrer. North-Holland 1978

\*<sup>25</sup> Jakobson, Roman: *Languages Paleosiberiennes*. In: *Les Langues du Monde*. 1951, pp.403-431

\*<sup>26</sup> 寺村秀夫とそのエピゴーネンの日本語分析にはこの問題についての理念的誤りが随所に見られる。特に『日本語のシンタクスと意味』I (1982), II (1984) (くろしお出版) の論理的な誤りについては金子亨 1995 でいくつか指摘した。

\*<sup>27</sup> Jost Trier: *Der deutsche Wortschatz im Bezirk des Verstandes*. Carl Winter 1931 がその嚆矢だったが、言語研究にも及んだ民族主義的干渉によって第二次大戦後もこの分野の研究は意味を失った。トリーアの研究自身は語彙の史的变化を語の意味の領域の推移として記述した優れた見解であったが。

\*<sup>28</sup> Puxta, M.N., *Nivkhsij razgovornik i tematičeskij clovar'* (Nick-Russian Conversation and Daily-Life Thesaurus), ed. by L. Galina & T. Kaneko. ELPR A2-017, 2002 から

\*<sup>29</sup> 別形は Савельева&Таксами 1970 のもので、ここでルアーとしてあるのは人工ルアーではなく、ただの釣り餌のことかもしれない。母音の違いはどちらのせいかわからない。なおPuxta、Taksami両氏とも同じくカリマ村の出身者である。

\*<sup>30</sup> В.Н. Неद्याлков, Г.А. Огаина: *Результатив и континуатив в нивхском языке. Типология результативных конструкций*. ред. В.Н. Неद्याлков, Лернинград Наука 1983)。論集の編者ネジャルコフと共著となっているが、これはオタイナさん自身の論文である。

\*<sup>31</sup> -γətaは、-γətのアムール方言形であるとオタイナさんはこの論文で書いているがPanfilov 1965 もその他の資料でも-γətであるので、さらに小さな方言の形かも知れない。

\*<sup>32</sup> 金子亨『言語の時間表現』1995、『言語の時間表現』自評 2008 (共にKaneko Tohru HP「言語・反戦」参照)

\*<sup>33</sup> Kaneko Tohru: *Nivkh incorporation revisited*. in: *CES 11*, 2009.で接辞の順序について書いたもので、それを

参照されたい。

\*34 古いものでは、井上和子『変形文法と日本語』下 大修館 1976 がこの嚆矢であった。

---

### 参考文献

阿部潤「深層構造はどうなったか」月刊『言語』vol.3.11. 2008.11.

Åqvist, L. & F. Guenther: Fundamentals of a Theory of Verb Aspect and Events within the Setting of an Improved Logic. In: *studies in formal semantics*, ed. by F. Guenther & Ch.Rohrer. North-Holland 1978

Bar-Hillel, Johoushua: *Aspect of Language*, Jerusalem 1970

Chomsky, Noam: *The Logical Structure of Linguistic Theory*. (1955/56) Plenum Pr. 1975

----, *Syntactic Structure*. Mouton 1957

----, *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT 1965

----, *Cartesian Linguistics* 1966

----, *Lectures on Government and Binding*. Foris SSG 9 1981

----, *The Minimalist Program*. MIT 1995

Dowty, David: *Word Meaning and Montague Grammar*. Reidel 197

Humboldt, Karl Wilhelm von: *Ueber die Kawi-Sprache auf der Insel Java*. Band 7 von *Humboldts Gesammelte Schriften* in 7 Bdn. Preussischen Akademie 1836 Einleitung=Ueber die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluss auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts

engl. Translation: Buck, George C. & Frithjof A. Rawen: *Linguistic Variability & Intellectual Development*, Univ. of Miami Pr. 1971

Heat, Peter: *On Language. The Diversity of Human Language-Structure and*

*its*

*Influence on the Mental Development of Mankind*. Cambridge Univ. Pr.

fr. Translation: Pierre Caussat: *Introduction a l'oeuvre sur le Kavi*, Ed. du Seul. 1974

rus Translation: Г. В. Рамишвили; *Избранные труды по языкознанию*, П рогресс 1984

井上和子『変形文法と日本語』下. 大修館 1976

岩本遠億『事象アスペクト論』開拓社

Jakobson, Roman: *Langues Paleosiberiennes*. In: *Les Langues du Monde*. 1951

金子亨『言語の時間表現』ひつじ書房 1995

同自評 2008 (『国文学 解釈と鑑賞 2008-1』至文堂

Kaneko Tohru: *Nivkh incorporation revisited*. in: *CES II*. 2009

---

国弘 哲弥 g ほか『ことばの意味』平凡社 I (1976), II (1979), III (1982)

---

Lakoff, G., On generative semantics. in: D.D.Steinberg/Jakobovits,L.A.: *Semantics, An Interdisciplinary Reader in Philosophy,Linguistics and Psychology*..Cambridge Uni. Pr.1971 (1.ed), p.247

McCawley, J. D.:Lexical Insertion in a Transformational Grammar without deep structure, in: *Proceedings of the Chicago Linguistic Society* 4. 1968

中島平三『言語の事典』朝倉書房 2003

В.Н. Недеялков, Г.А. Отаина: Результатив и континуатив в нивхском языке. *Типология результативных конструкций*. ред. В.Н. Недеялков, Лернинград Наука 1983)

Ogden, Ch. K. & I. A. Richard, *Meaning of Meaning*, Routledge & Kegan Paul) 1923

Панфилов, В.З., *Грамматика Нивхского Языка. 2*. Академия Наука 1965

Pustejovsky, James: An integrated theory of discourse analysis, in: *Machine Translation. Theoretical and methodological issues*, ed. by Sergei Nirenburg. Cambridge, 1987

----, Events and Semantics of Opposition. In: *Events as Grammatical Objects*, ed. by Tenny, C. & J. Pustejovsky 2000 CSL

----, Construction and logic of concepts. In: *The Language of Word Meaning*. Ed. by Bouillon, P., & R. Busa. Cambridge 2001:

Puxta, M.N., *Nivkhskij razgovornik i tematicheskij clovar'* (Nivkh-Russian Conversation and Daily-Life Thesaurus) .

ELPR A2-017, 2002, ed. by L. Galina & T. Kaneko

Elizabeth Ritter & Sara Rosen: Even Structure and Ergativity, in: *Events as Grammatical Objects*, ed. by Carol Tenny & James Puskajovsky, CSL I 2000, pp. 187-23870

Савельева В. Н. & Ч. М. Таксами : *Нивхско-русский словарь*. Москва, Совет.-Энци.1970

Sapir, Edward, *Language.An introduction to the study of speech*. Harvest Book 1921 (1949~)

Saussure, F. de: *Cours de Linguistic Générale*, (1919) ed. Tillio de Mauro. Payothèque, 1981

田中克彦『チョムスキー』岩波 1983

Tenny, Carol & James Pustejovsky: A History of Events in Linguistic Theory, in: *Events as Grammatical Objects*. Ed. by Tenny, C. & J. Pustejovsky. 2000.CSLI, Stanford California

Trier, Jost: *Der deutsche Wortschatz im Bezirk des Verstandes*. Carl Winter 1931

寺村秀夫：『日本語のシンタクスと意味』I (1982), II(1984) (くろしお出版)

Vendler, Zeno: *Linguistics in Philosophy*. Cornell Univ. Pr. 1967

---

---